

発生程度を診断し、今後の進行程度とそれがいもの収量と品質へどのように影響するかを診断する。それらを評点に表わす方式を案出したが発表の段階にいたっていない。

現在最大の被害をもたらしているのはナンブ病である。これはアグリマイシンによる約1週間間隔の防除が指導されているが、年々防除回数が増加しているにもかかわらず、防除しきれない。防除できているようにみえているが、倒伏して折り重なった茎に葉がないのは、大部分がナンブ病によるもので、茎も全体に侵されている。立ち上がった茎頂部は新葉の集まりのためかかり難く、いかにも防除効果があるように見えるのである。ナンブ病がひどい場合はいものにも侵入しているとみるべきで、選別を逃れて貯蔵されると大量腐敗で大損害をきたす。それでこの時期に被害の程度を5段階に分け、ひどいものは貯蔵できないという判断が必要なのである。

地上部の病害程度といもの被害は必ずしも一致しない。それにいものには地上部に被害の

でない病害が多い。その最悪のものがソウカ病と粉状ソウカ病であり、ほかにカンブ病、タンソ病、象皮病類似症、ギンカ病などがある。

最も重要なのはこれらの病害がすでにこの時期にあること、それらの初期症状をみると、多くは皮目肥大が原因で、そこから侵入していることである。皮目肥大とはいもの呼吸に必要な酸素の取り入れ口である皮目が、周囲の多湿条件で酸素を求めて拡大するもので、正常の直径0.5mm前後のものが、1～2mmになり、傷をなおすためのコルク細胞が盛り上がっている。このように傷ができるから微生物が侵入するし、いものは酸素不足で全体が活力を失っているから侵入をうけやすい。

全国的に蔓延して規格歩留りを大きく低下させているソウカ病、粉状ソウカ病、象皮病類似症は、いずれも皮目肥大からの侵入が始まりで、皮目肥大を防げば被害を軽減できる。皮目肥大の防止は排水性向上と十分な培土によって可能である。逆に培土を行わないマルチ栽培では多発しやすい。でもこれらは土壌病害だから、イネ科作物の後作にする輪作確立が基本的対策である（『パレイショ増収1,000問答』参照）。

規格歩留りを低下させるもう一つの要因がクロアザ病による変形いもである。コブいも、出目いも、ジグザグいも、ショウガいも、ワレいもなどを、一般には二次生長と称し、あたかも気象要因のように扱っているが、ほとんどはクロアザ病に基く被害である。そしてこれらの原型はこの時期に明確になっており、それらの収穫期における減収程度を診断し、これも土壌病害であり、イネ科作物の後作にしないと将来に向けて安定した経営になりえないことを警告する。

『ジャガイモと映画—その3』

●7年目の浮気

エアコンを持たないアパートに住むマリリン・モンローが、地下鉄通過時に換気孔から出てくる涼しい風をスカートの下に受けつつ、「今度の方が前のより涼しいわ。きっと急行ね」

モンローの住む部屋の下には、結婚7年目の中年サラリーマンリチャードが一人でいた。妻子を避暑地に送ったのだが、その日2階に住むモンローがトマトの植木鉢を落としてしまい、エアコンのある彼の部屋に、輸入もののシャンパンと袋入りの『ポテトチップス』を持って詫びにくる。……で、それからだが。

（北海道立中央農業試験場
主任研究員 浅間和夫）